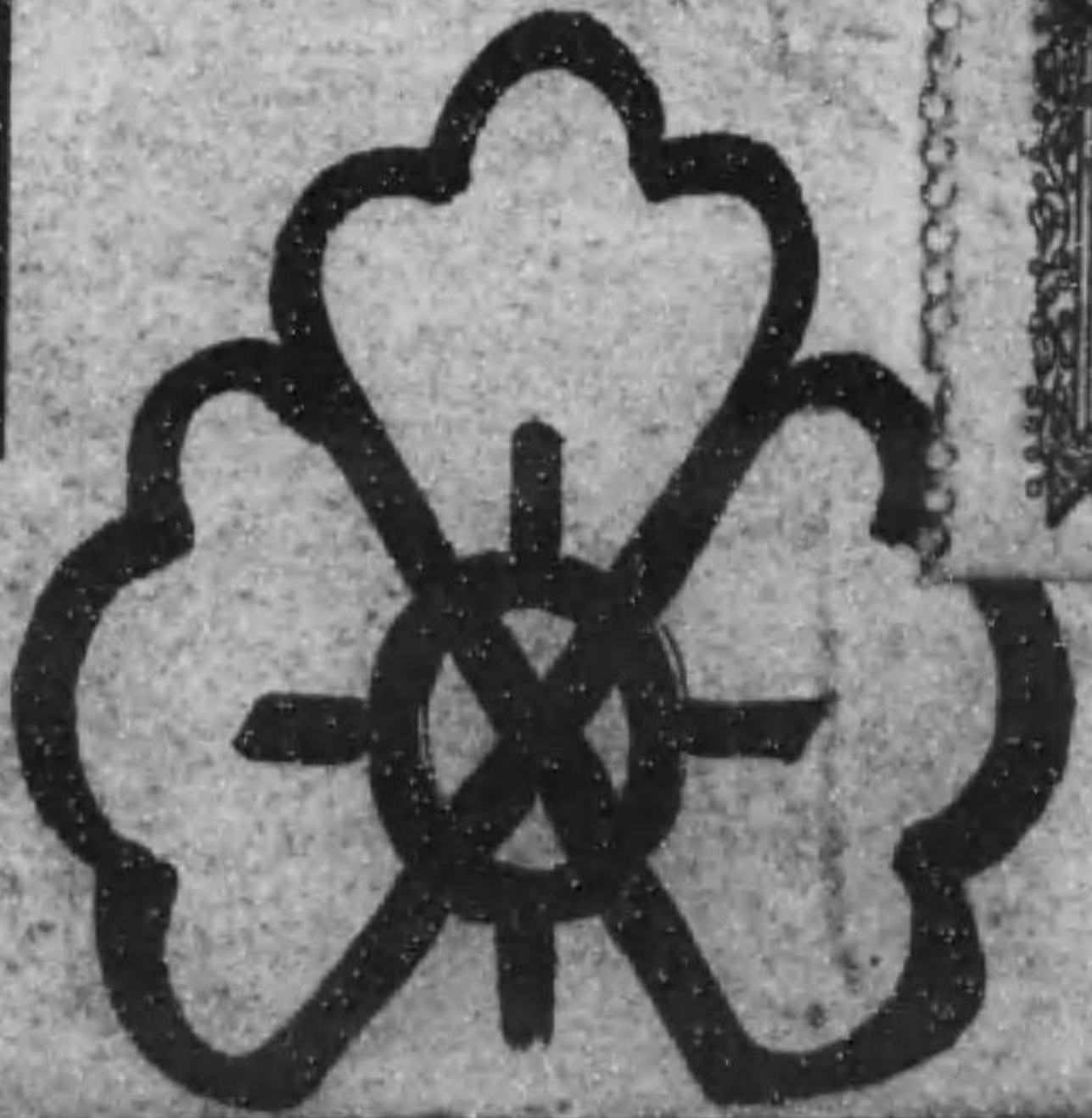


天明
皇治
御
製
集



始



特110
668



明治天皇御製集

大正
1.11.22.
内交



皇 天 治 明



先帝五歳の時の御宸筆



御製

四方海にふるを燈つとせふふ
 なごなりけらるるのたけくく
 白鷺のまじりやハ御製

と具玩の時幼御帝先
 製御筆將大郷東

本書發行の主旨と
明治天皇と和歌

先帝の我が國風に御嗜好深くましましし事は、普く萬民の洩れ承る所なり。陛下には多端なる政務を御親裁遊ばしつつも、聊かの御暇あれば御詠懷をせさせ給ひ、尙ほ萬民にも此道を奨まし給はんとの大御心より、新年には特に御題を賜ひて、萬民の詠進をも許させ給へり。陛下が國風によりて萬民との交通を許させ給ひし大御心の程拜察しまつるも畏し。

更に又 陛下の、上御一人として萬民に臨ませ給ふ御仁慈の程、その折々の御幽懷の程など、洩れなくも御製とせさせられ、此れを萬民に示させ給ひける御事、萬民より仰ぎ奉りて如何に有り難く、忝く、畏かれども大御心に親しみまつる上に於て、如何に深きよすがとはなりけん。御嚴格なる乾徳を洩れ承り、詔勅を拜讀せる萬民は、更に御詠懷を誦しまつる事によりて、畏かれども直ちに玉音を耳にするの感を抱き、感佩したる事測り知られず。

先帝の御製は畏くも 陛下が萬民に下し賜へるいとも尊き物

の一つなり。同時に萬民は至寶として、永遠に其胸臆に銘じて保存すべきものと言ふべし。

「明治天皇御製集」發行の微旨は實に此所にあり。

歌聖とも申すべき 先帝の、和歌につきて洩れ承る所は其事ども多くして此所には傳へ難し。御歌所主事坂正臣氏の洩れ承りて語る所は、最も要を得たるものなれば、こゝに紹介すべし。

歌聖とも申すべき 先帝陛下には、申すも畏きばかり和歌に御熱心にあらせられ、折に觸れ事に感じさせられて、大御心を

打ち出でさせ給へり。數ならぬ身の我は、洩れ承る所もいとも
稀れなるが、前々の宮内大臣岩倉公は、在世中この御事につ
て語らるゝやう、「陛下の和歌に御熱心なるは、唯々驚き入る
の外はあらず、其御歌を詠ませらるゝや、世の常の歌人の、文
机に頬杖つきてかにかくに苦吟する如き事は絶えてあらせられ
ず、御暇のおはします時に、御煙草をくゆらし給ひつゝ、すら
すらと口ずさませられ、御料紙に認め置かるゝまでにて、御推
敲の爲に表御用を缺かせ給ふやうの御事は、決しておはしまさ
ざりき」と。

御製は初めは、女官税所敦子に拜見仰付けられ、同女死後は、
小池道子仰付けらる。女官は御製を清書して帳面に作りたる
上、御歌所長の手許に廻す。御歌所長は、恭しく其御歌帳を拜
見して別に寫しがきを作り、一々評點を施して御覽に入れ奉る
が例なりきと。

前の御歌所長高崎正風男の拜見したる御製のみにて、七萬
首以上に上りぬと。此れに高崎男の拜見せざりし前の御製をも
加ふれば、恐くは十萬首の多きにも上るべしと思はる。
先帝には極めて御誦遜にましまし、右の女官、御歌所長以外

の者には、常に御製を御示しあらせられず。他に洩れ聞えたる
事の御耳に入れば、御氣色たゞならずおはしましきと。

明治四十三年の春、大隈伯は自ら著せる所の國民讀本を、先
帝の御手許まで献上せり。陛下には其書を御覽遊ばされしに、
中に多くの御製の載りをるを見そなはし、直ちに近侍の者に、
「高崎を呼べ」との御意ありたり。近侍の者はたゞならぬ御氣
色に、何事のおはしましてかと、其旨を高崎男に傳へぬ。男は
御前に伺候すれば、先帝にはいとも嚴かに、「如何なれば朕が歌
を、斯くも世には洩らせしとぞ」と御尋ね遊ばされぬ。男は恐懼

して奏上するやう御嚴重なる勅、臣正風、恐懼措く所を知らず。
されど其御咎めは豫てより期したる事に候。勅許を得ずして御
製を洩らしたる際、臣竊かに心中に思へらく、陛下の御製は
莊重典雅にして、一として絶唱ならざるはあらず。さるが中に
も、國民の傳誦して道徳を涵養すべき御製を、徒らに九重の奥
深く秘め置かせ給はんは、惜しみても餘りある事に候。併しな
がら、御謙遜に渡らせらるゝ陛下には、此事願出で候も勅許
あらせらるゝや如何に。臣此れを思ひて、罪萬死に當るを知り
つゝも擅まに致したる次第に候へば、如何やうの御罰を蒙り候

とも悔い侍らずと奏上しぬ。陛下には、御無言にて御肯きあ
らせられ、其儘御咎めもあらせられざりき」と、高崎男汗して
語り聞せぬ。

先帝には、御自ら和歌を好ませられ給ふばかりにあらず、廣
く歌道奨励に御心を用ひさせ給ひ、毎年御題を下し賜りて萬民
に和歌を献せしめ、勸覧あらせらるゝは申すに及ばず、殊に明
治二十年以前より京都の公家華族に勸めて「向陽會」といふ歌
の會を起させ、毎年御賜物あり。殊に春秋二季には、時の御歌
所長を差遣せられ、御奨励遊ばし給ひぬ。

洩れ承る限りにては、先帝最終の御製は、明治四十五年
の勅題なりし「松上鶴」の御一首なりしとか。

大正元年八月

編者識

目次

- 一 明治天皇御眞影
- 一 明治天皇御幼時の御宸筆
- 一 明治天皇御幼時の玩具と伯爵東郷平八郎氏筆御製
- 一 本書發行の主旨と明治天皇と和歌
- 一 御製

春(四十二首).....	一頁
夏(五十九首).....	二五頁
秋(十九首).....	五七頁
冬(二十六首).....	六九頁
雜(百七十七首).....	八五頁
表紙.....	中村不折

春

貴賤迎春

をさまれる世世のためしを都人

ひなもろともにいはいはふ春かな

新年祝道

年立ちて祝ふにいとど直ぐなれと

我世の道をおもひけるかな

都鄙迎年

都にも遠き里にもあたらしき

おなじ年をばうち迎へつつ

新年望山

あたらしき年を迎へて富士の根の

高きすがたを仰ぎ見るかな

鶯入新年語

新らしき年のほぎ言いふひとに

おくれぬ今朝のうぐひすの聲

新年祝言

新玉の年もかはりぬ今日よりは

民のこころやいとどひらけむ

池水浪靜

池水の上にもしるし四方の海

なみしづかなる年のはじめは

寄國祝

あらたまの年を迎へてよろづ民

ひとつのころに國いはふらし

梅花先春

春風も吹くこちして新玉の

年の初日ににほふ梅かな

新年梅

立ちかへる年の朝日に梅の花

かをりそめたり雪間ながらに

新年海

梓弓八洲のほかもなみかせの

静かなる世の年立ちにけり

新年山

富士の根にほふ朝日もかすむまで

年立つ空ののどかなるかな

新年河

新玉の年立ちかへる河なみに

しめかざりせし舟も見えけり

新年松

あたらしき年のほぎごときく庭に

よろづよよばふ軒のまつかせ

新年雪

田に畑に雪を積れる民の爲

ゆたかにと思ふ年のはじめに

梅花盛

駒なべて行く人多し誰が里も

梅の盛りになりやしつらむ

雪中早梅

降り積る梢の雪をはらはせて

けさこそみつれ梅の初花

野初春

武蔵野は雪も消なくに朝がすみ

たな引きそめつ春のしるしに

雪後雨

消えのこる軒端の雪も解けぬらむ

ふる春雨のおとのどかなり

梅香薰袖

春風のさそふと思ひし梅が香の

うれしく袖にとまりけるかな

海邊霞

かぎりなき大海原の波の上に

たなびき渡る春がすみかな

山路春雨

暮れぬとて山路をいそぐ旅人の

袖しづかにも春雨ぞふる

川邊春月

玉川の清き流れにやどりても

猶おぼろなる春の夜の月

鶯

このごろは垣根の柳軒の梅

みな鶯の宿となりぬる

朝聞鶯

今朝はまたいづくの梅に宿るらむ

とほく聞ゆるうぐひすの聲

谷鶯

奥山の谷のうぐひすいでて啼け

都の梅はいまさかりなり

詠梅

立ちよりにて折らむと思ふ庭のおもの

梅の木するにうぐひすのなく

鶯聲和琴

玉琴の音にひかれ来て鶯も

をすの戸近く聲合はすらむ

風前花

春風の吹きまにまに散り来るは

いづこの庭の櫻なるらむ

霞中花

山ざくら匂ふあたりに朝な朝な

たな引きわたる春がすみかな

磯邊花

あらいその松の木かげにしほ風を

よきても咲ける山ざくらかな

見花

司^{つかさ}びと捧^{さか}ぐる文^{ふみ}は多^{おほ}かれど

花^{はな}見^みる程^{ほど}のひまはありけり

浦落花

さのふ今^け日^ふ春^{はる}もふけひの浦^{うら}風^{かぜ}に

浪^{なみ}路^ぢを^をか^かけ^てち^ちる^る櫻^{さくら}かな

月前落花

曉^{あかつき}の月^{つき}こそくもれ山^{やま}ざくら

梢^{こやし}にのこる花^{はな}やちるらむ

運 櫻

おく山の青葉がくれのおそ櫻

春におくれし色としもなく

松 上 藤

老まつの枝にかかりて咲きにけり

若むらさきの藤なみの花

瀧 邊 藤 花

木高くも繁れる松をつたひ来て

瀧つ岩根にかかる藤なみ

風 光 日 日 新

日にそひてけしき和らぐ春の風

四方の草木にいよいよ吹かせむ

春風來海上

千代よろづ變らぬ春のしるしとて

海邊をつたふ風そのどけき

春來日暖

吹く風ものどかになりて朝日影

神代ながらの春を知るかな

御題しらす

この春は梅うぐひすも忘れけり

民やすかれとおもふばかりに

岡雉子

蕨をる人もかへりしかた岡に

さぎすなくなり春の夕ぐれ

夏

溪新樹

花時を寒しといひてとはざりし

たにの櫻も若葉さしけり

雨中苗代

降る雨に小笠とりどり賤の男が

水口まつる小田の苗代

海邊首夏

若葉わかばさす磯山いそやまかげに打ちよする

波なみの音涼ねりやうし夏なつや來きぬらむ

川梅雨

さみだれに堤つみを水みづや越こえぬらむ

舟ふねにて通かふかはづらの里さと

首夏朝

ぬぎかへし袂たもとにかよふ朝風あさかぜの

うらめづらしき夏なつは來きにけり

雨中郭公

夏山なつやまの若葉わかばなびきて降ふる雨あめの

涼すずしき暮くれに啼なく郭公ほととぎす

郭公稀

たまさかに來なければこそ郭公

多くの人にめでられにけれ

故郷橋

たらちねのみ親のみ代の舊事を

思ひぞいづる庭のたちばな

折にふれて

窓ちかく花橋はかをれども

山ほととぎすいまだ來啼かず

夢後郭公

ほととぎす鳴く一聲のうれしさに

今見しゆめをわすれけるかな

月前郭公

この夕べ叢雲はれてほととぎす

すいしき月の影に啼くなり

御題しらす

燕飛ぶ影のみ見えて田植る時

家に人なき小山田の里

深夜水雞

とのゐ人語らふこゑも絶え果てて

更け行く夜半に水鶏なくなり

海邊夏

伊勢の海の清き渚に打ちよする

なみの音こそ涼しかりけれ

田家夏月

瓜畑うりばたにおりたつ人の見みゆるかな

しづが垣根かきねの夏の夜よの月つき

砂月涼

涼すずしくも月の光ひかりになりなりにけり

浪なみのあらひし濱はまのまさご路ぢ

夏述懐

政事まつりごといでてきく間はかくばかり

暑あつき日ひなりと思おもはざりしを

夏朝

朝あさのまに物學ものまなばなむ幼子こどもも

晝ひるは暑あつさに倦うみはてぬべし

夏
夕

庭草に水そそがせて月を待つ

夏のゆふべは思ふ事なし

夏
山水

年年におもひやれども山水を

汲みて遊ばむ夏なかりけり

夏
庭

昨日かも切り下したる我宿の

庭木の枝はまたしげりけり

夏
竹

白露の風にこぼるゝかす見えて

あさ日すすしき竹の下庵

竹風涼

文机ふくろの上うへに夜露よつゆもかつ散ちりて

すずしくなりぬ竹たけの下した風かぜ

曉更雞

そらねかと思おもふばかりに夏なつの夜よの

あけがた早はやく鳥とりが音ねぞする

夏鳥

やり水みづにつばさ洗あひて日ひざかりは

鳥からすも庭にはをあらさざりけり

川鮎

玉川たまがはのはやき流ながれの底そこすみて

さばしる鮎あひの數かずも見みえつつ

松上蟬

なく蟬の聲ばかりして吹く風の

音もたえたり岡の松原

蟬聲滿耳

傍らの人の言ふ事ささとれず

蟬の聲のみ耳にひびきて

蟬

水無月の照る日の影はさしながら

時雨にまがふ蟬の聲かな

行路蟬

風渡る木かげをかよふ小車の

とまれば蟬の聲きこゆなり

馬上聞蟬

日をさけて夏の木蔭をゆく駒の

上になき立つ蟬のこゑかな

夏雨

あらがねの土さへさくる日盛りの

あな心地よや今の村雨

海上夕立

和田の原追風をうけて行くふねの

片帆にかかる夕立の雨

行路夕立

雨衣をかくる間もなくゆく人の

車にかかる夕立の雨

旅泊夕立

野道にてあらざりしこそ嬉しけれ

旅のやどりにかかる夕立

旅夕立

旅人を野邊にのこして夕立は

高嶺はるかに越えにけるかな

撫子露

はらはすば思はぬ方にかたぶかむ

露おきあまる撫子の花

蓮露

長くなりまどかになりて蓮葉に

まろぶも涼し露のしら玉

水邊撫子

寄る波なみに打ち上げられて伏ふしながら
花はな咲さきにけり河原かはらなでしこ

隣朝顔

いづれより種たねはまきけむ中垣なかがきの
うら表おもてなく咲さける朝あさがほ

水邊夏草

行く水みづは照てる日に涸かれていささ川がは
風かぜになみよる薄すくかるかや

扇不離手

あふぎのみ手てにならしつつ日ひ盛さかりは
筆ふでをもえこそ取とられざりけれ

團扇

青丹よし奈良のうちにはは都にて

ありし時にや作りそめけむ

扇

日ざかりは筆とる事もものうくて

扇をのみぞ手ならしにける

御題しらす

打ち續く市の家居はあつからむ

風の吹き入る窓せまくして

池夏風

池水の汀吹きこす朝風に

蓮の花の散るも見えつつ

夏 燈

軒ひき近くかけつらねたるともし火ひの

またたく程ほどの風かぜだにもなし

夏 市

百も日かさく花はなまばゆくも見みゆるかな

今いまやあつさの盛さかりなるらむ

夏 星

星ほしのとぶかげのみ見みえて夏なつの夜よも

更よけ行く空そらは淋さびしかりけり

夏 氷

厚あつこほり氷こほりもちほこぶ間まにとけぬらむ

盛もりしうつはに水みづのたまれる

同

夏なつしらぬ氷こほりみづ水をばいくさ人びと

つどへる庭にほに分わかちてしがな

夏車

るまごまの重おも荷にをつみて日ひに焼やけし

いさごの上うへを車くるまひくになり

同

重おも荷にひく車くるまの音ねぞ聞きえける

照てる日ひの暑あつさ堪たへがたき日ひに

庭泉

庭にほの面おもてに清しみづ水の音ねはきこゆれど

むすぶいとまもなき今年ことしかな

御題しらす

晝もなほ蚊の聲しげしたかむらの

蔭のあづまや涼しかれども

夏人事

窓のうちに扇とりても暑き日に

照る日をうけて小草かる見ゆ

夏夢

ぬば玉の夢にふたたび結びけり

すすしかりつる松の下水

夏里

宵にみし螢はきえてあかぼしの

影こそうつれ池水の上に

秋

夏
舟

日^ひざかりに漕^こぎつらねゆく川^{かは}舟^{ふね}は
泳^{およ}ぎに出^いづる子^こ等^らや乗^のるらむ

初秋夕

夕ゆふづく日ひかげろふ森もりの木こがくれに

ひぐらし鳴なきて秋風あきかぜのふく

早秋風

吹ふく風かぜの音ねこそかはれ山やまの端はの

松まつもはじめて秋あきや知しるらむ

垣秋風

枯れつるもいまだ拂はぬ朝がほの

かきねゆすりて秋風ぞふく

秋風

あらしとも思はざりしを芭蕉の葉

吹きやぶりたり庭のあき風

秋風寒

ふじの嶺に初雪見えてうち日さす

みやこも寒き秋かせぞふく

月前風

をちこちに尾花なみよるかげ見えて

月すむ野邊に秋風ぞ吹く

仲秋月

雲霧もかからざりけり大空に

こよひとみてる月の光に

新秋雨

露だにもいまだ結ばぬくさむらに

一むらそそぐ雨のすすしさ

窓前蟲

くさ雲雀鳴きもぞやむと秋の夜の

月なき窓もさされざりけり

海邊蟲

浪の音とほざかりゆくひきしほに

蟲の音たかし濱の松ばら

月前菴

有明の月もさし入る窓の戸に

影さへ見えてなくきりぎりす

秋川

おち鮎のながるる見えて桂川

すみまさり行く水のいろかな

月明星稀

天の原みちたる星のかけ消えて

月の光になれる空かな

夕霧

堤ゆく人影たえて墨ぞめの

夕ぎりふかし寺島の里

海上霧晴

音ばかり聞えし浪の見えそめつ

浦わのさぎりはれ渡るらむ

馬上紅葉

鞭打たばもみちの枝にふれぬべし

駒をひかへむ岡越えのみち

故郷草花

園守やひとり見るらむ昔わが

集めし庭の秋ぐさの花

炭竈

炭がまに通ふ山がつ寒からむ

朝霧ふかし小野のやまみち

冬

秋
夜
火

秋あきの夜よの長ながにあかす燈火ともしびを

かゝげて文字もじをかきすすみつゝ

山家雪

山里の軒の笥の音はして

雪静かなる朝ぼらけかな

月前雪

月白く冴えたる庭と思ひしは

隈なく雪の降れるなりけり

月照殘雪

消えのこる松の木かげの白雪に

さす影さむし有明の月

風前雪

吹きまよふ風のまにまに誘はれて

家のうちまで積る雪かな

船中雪

漕ぎいでてふねの中より見渡せば

雪おもしろし浦の松原

車上雪

賤の男がひとり曳き行く小車の

重荷の上につもる雪かな

鷹狩雪

ふる雪のしらふの鷹を手にするて

朝狩きそふ冬は來にけり

田家雪

あし曳の山田のいはの竹ばしら

かたぶくばかりつもる雪かな

霰

山風に吹きおろされて今日もまた

ふもとの里は霰降るなり

田家時雨

刈り残す山田の晩稻打ちなびき

寒きあらしに時雨ふるなり

氷満池上

池水は氷らぬかたもなかりけり

いづこか鴛鴦の夜床なるらむ

池厚氷

風さわぐ池の汀のあつごほり

浪のすがたにむすびけるかな

蘆間薄氷

霜がれの葦の葉さやぎ吹く風に

結びそめたる薄ごほりかな

氷留水聲

山川の水は氷のとちはてて

風の音のみたかきころかな

寒夜風

窓の戸を叩くあらしの音さむし

池の氷もいまか閉づらむ

水鳥聲

あし鴨の群れて浮べる池の面は

つばさの風に浪やたつらむ

曉千鳥

磯崎の波間の月の影落ちて

あかつき寒く千鳥なくなり

池水鳥

牙ゆる夜の月の光に池水の

汀の鴨のかずも見えつつ

濱千鳥

鹽風をつばさにかけて冬の夜の

長濱づたひ千鳥なくなり

庭落葉

木がらしの吹く度ごとに散り積る

庭の落葉はいくへなるらむ

江寒蘆

難波江の葦の枯葉に置く霜の

深くも冬はなりにけるかな

爐邊述懷

埋火を掻き起しつつつくづくと

世のありさまを思ひけるかな

雪中竹

この上に幾重ふりそふ雪ならむ

たかむら高くなりまさりつつ

冬人事

み越路の雪にこもりて少女等は

夏のころもや織り出すらむ

歳暮近

あらたまの年の終りも近づきぬ

暑しさむしと言ひくらす間に

寒月照梅花

照る月のひかりはいまだ寒けれど

春に變らぬ梅が香ぞする

雜

雪埋松

海原^{うなはら}はみどりに晴^はれて濱松^{はままつ}の

こずるさやかに降^ふれる白雪^{しろゆき}

竹

石垣いしがきのひまに生おひたる吳竹くれたけは

千代ちよを貫つらぬく根ねざしなるらむ

同

笛ふえとなり弓矢ゆみやとなりてくれ竹たけの

よはさまさまに變かはり行くかな

縁竹年久

九重のうてなの竹の深みどり

かはらぬ影ぞ久しかりける

竹有佳色

植ゑおきし庭の吳竹よよをへて

變らぬ色のたのもしきかな

澗底古松

世の中のあらしを知らぬ谷底の

松は静かに千代を經ぬらし

松

雲の上うへに立たち榮さかえたる山松やままつの

たかきにならへ人の心こころも

松年久

故里ふるさとの老木おいきの松まつもをさなくて

見みし世よながらの緑みどりなりけり

孤島松

波なみたかき沖おきの小島こじまのひとつ松まつ

いつの世よにかも根ねざしそめけむ

瀬

さざれさへ行く心こころ地ちして山川やまがはの

浅瀬あさせの水みづのはやくもあるかな

水

くろがねの舟ふねもたやすく動うごかして

つよきはみづの力ちからなりけり

同

うつはにも随したがひながら巖いはをも

徹とほすは水みづのちからなりけり

河水久澄

昔むかしより流ながれたえせぬ五十鈴すず川がは

なほ萬代よろづよも澄すまむとぞ思おもふ

四海清

沖おきつ波なみよりくる舟ふねも年とし年としに

數かずそふ世よこそ樂たのしかりけれ

晴天鶴

ふじのねも遙はるかに見みえて蘆田あした鶴つの

立たち舞まふ空そらそのどけかりける

庭上鶴馴

なれなれてへだて心もなかりけり

我ここのへの庭にすむ鶴

蘆間鶴

巢立ちにし雛あさらせて一つがひ

たづぞ下り立つ浦の蘆原

旅宿雨

草まくら旅の宿につきてのち

うれしき雨のふり出でにけり

旅泊重夜

波風の荒らしといひて今宵また

おなじ港に浮寝をぞする

田家夕

あげまきも牛ひき連れて歸り來ぬ

夕げのけぶり見ゆる我家に

家

ことそぎし昔の家の造りざま

今も田舎にのこりけるかな

蝸牛

ささやかに見ゆる家居も蝸牛

獨りすむにはことたりぬべし

時計

時はかる器は前にありながら

たゆみがちなり人のこころは

硯

時の間に硯の水のかわくにも

けふの暑さのしられけるかな

峯

大空にそびえて見ゆる高嶺にも

のぼれば登る道はありけり

草

いぶせしと思ふ中にも擇びなば

薬とならむ草もこそあれ

薄暮眺望

家なしと思ふ方にもともし火の

影見えそめて日は暮れにけり

夕眺望

夕ゆふやけの空そらの景色けしきぞうるはしき

みどりはてなき松原まつはらの上うへに

親

むらぎもの心こころつくして報むかひいなむ

おふし立てたる親おやのめぐみに

同

たらちねのみ親おやのをしへあら玉たまの

年とし経ふるままに身みにぞ染しみける

同

たらちねの親おやの心こころをなぐさめよ

國くにに務むとむるいとまある身みは

同

國くにのため斃たはれし人ひとを惜をしむにも

おもふは親おやのこころなりけり

御題おんたいしらす

いつくしと愛あひでの餘あまりに撫なで子この

庭にわの訓ををおろそかにすな

子

思おもふ事ことつくらふ事こともまだしらぬ

幼をさなごころのうつくしきかな

同

思おもふ事ことうちつけにいふ幼をさな子この

言こと葉ははやがて歌うたにぞありける

兄弟

千代よばふ聲ぞ賑はふ山松の

つらなる枝のひろき園生は

御題しらす

若竹の生ひ行く末を思ふ世に

庭の敷をおろかになせそ

友

過をいさめ交して親しむが

まことの友の心なるらむ

人

人はただまことの道を守らなむ

高き賤しきしなはありとも

老人

つく杖つえにすがるともよし老人とじの

千歳とせの坂さかをこえよとぞ思おもふ

同

杖つえつきて道みち行くまでに老おいし身みも

昔むかしたづぬるしをりとぞなる

鶴思子

前まへになり後うしろになりて難ひなまもる

たづの心こころのあはれなるかな

四海兄弟

四邊よの海うみ皆みなはらからと思おもふ世よに

など浪風なみかぜの立たちさわぐらむ

天

浅みどり澄み渡りたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

詞

言の葉の花の色こそかはりけれ

おなじ心の種ときけども

行

よしあしを人の上には言ひながら

身をかへりみる人なかりけり

同

やすくしてなし得難きは世の中の

人の人たるおこなひにして

同

世の中の人をつかさとなる人の

その行よただしからなむ

心

ともすれば掻き濁しけり山水の

すませばすまます人のこころを

忠

空禪の世は安らかに治まりぬ

我れをたすくる臣のちからに

同

ますら男に旗手さづけて思ふかな

日の本の名をかがやかすべく

仁

國くにのため仇あたなす仇あたはくだくとも

いつくしむべき事ことなわすれそ

樂

千ちよろづの民たみと偕ともにし樂たのしむに

ます樂たのしみはあらしとぞ思おもふ

鏡

櫛さかき葉はにかけし鏡かみをかがみにて

ひとも心こころを磨みがけとぞ思おもふ

同

打うち對むかふ度たひに心こころをみかけとや

かがみは神かみの造つくり初はじめけむ

歌

天地を動かすばかり言の葉の

誠の道をきはめてしがな

同

こともなく調べあげたる言の葉の

花にぞにほふ國のすがたも

同

思ふ事ありのまにまにつらぬるが

いとまなき世のなぐさめにして

同

まごころを限りなき世にとどむるも

大和ことばのいさをなりけり

同

まごころを歌ひ上げたる言の葉は

一たび聞けば忘れざりけり

言葉

言の葉の誠の道をつきはなの

もてあそびとは思はざらなむ

薬

へだてなくかくる恵みの露こそは

あをひとぐさの薬なりけれ

同

こころある人のいさめの言の葉は

やまひなき身の薬なりけり

玉

曇りなき心のその知らるるは

ことばの玉のひかりなりけり

同

白玉をひかりなしとも思ふかな

磨き足らざることをわすれて

寶

蘆原の國富まさむと思ふにも

青人くさぞ寶なりける

同

傳へ来て國の寶となりけり

ひじりの御代の詔ぶみ

瓦

なにがしの寺てらの文字もじあるふる瓦がはら

たまにならべて飾かざりけるかな

太刀

あだし野のにいさ輝かやかせますらをが

とぎすましたる太刀たちの光ひかりを

劔

ますら男をとこが常つねにきたへし劔つるぎもて

むかふ醜みにく草くさなぎ盡つくすらむ

牛

つはものの糧かてもまぐさも運はこぶらむ

牛うしもいくさの道みちにつかへて

馬

久しくも我が飼ふ駒の老い行くを
をしむは人にかはらざりけり

盃

静かにも世はをさまりて喜びの
盃さかづきあげむときぞまたるる

武

弓矢もて神の治めし國人は

ことなき世にも心ゆるぶな

教
育

いさをおる人を教へのおやにして
おふし立てなむ大和なでしこ

同

ともすればあらぬ方にと踏み迷ひ

教へがたきはひとの道なり

同

正しくも生ひ茂らせよ教へぐさ

をとこ女の道をわかちて

同

善きを取り悪きを捨てて外國に

おとらぬ國となすよしもがな

教
育

進みたる世に生まれたるうなるにも

むかしの事をまづ教へなむ

同

山やまをぬく人の力ちからもしきしまの

大和心やまとこころぞもとるなるべき

同

世よの中なかの人ひとにおくれを取とりぬべし

進すすまむ時ときにすすまざりせば

學 校

今いまはとて學まなびの道みちにおこたるな

ゆるしの文ふみを得えたるわらはべ

庭 訓

たらちねの庭にはの教をしへは狭せまけれど

ひろき世よに立たつ基もととはなれ

同

さしのぼる朝日の如く爽やかに

持たまほしきは心なりけり

手習

竹馬に心の乗りててならひに

怠りし日を今おもふかな

筆

國のためふるひし筆の命毛の

あところぞ残れ萬代までに

披書思昔

暫らくはをさな心にかへりけり

よみならひにし書を披きて

讀書

今の世に思ひくらべていそのかみ

古りにし書をよむぞたのしき

机

寄りそはむ暇はなくとも文機の

上には塵を据ゑずもあらなむ

御題しらす

つねに身の養ひ草をつみてこそ

人の齡は延ぶべかりけれ

同

開けゆく道にいでても心せよ

つまづく事のある世なりけり

同

何事も思ふがままにならざるが

かへりて人の身の爲めにこそ

同

花になり實になる見れば草も木も

なべてつとめのある世なりけり

同

思ふ事貫かむ代をまつほどの

月日は長きものにぞありける

同

端居して月見るほども戦の

にはのあり様思ひやりつつ

同

分けばやと思ひ入りぬる道にこそ

高きしをりも見え初めにけれ

同

つはものと共に勇みてすすむてふ

駒のこころも人におくれじ

同

千萬の仇をおそれぬますらをも

この暑さには堪へずやあるらむ

同

空蟬の世のため進むいくさには

神もちからを添へざらめやは

同

いそのかみ古きためしを温ねつつ

新らしき世の事もさだめむ

同

千早ふる神のころにかなふらむ

わが國民のつくすまことは

同

神つ代の御代のおきてを違へじと

思ふぞおのが願なりける

同

暑しとも言はれざりけり沸え返る

水田に立てる賤をおもへば

山路

岩が根のこごしき山を照る日にも

たゆまず越ゆる我いくさびと

塵

つもりては拂ふ方なくなりぬべし

塵ばかりなる事とおもへど

島

後にはいつなりにけむ漕ぐ舟の

行方はるかに見えし島山

植物苑

我國に茂り合ひけりとつくにの

草木の苗も生ふしたつれば

賤

おのが身を修むる道はまなばなむ

賤がなりはひいとまなくとも

民

國のためいよいよつくせ千萬の

民のころをひとつにはして

賤家

賤がすむわらやの様を見てぞ思ふ

雨かせあらし時はいかにと

田家翁

子らは皆いくさの庭に出で果てて

翁やひとり山田もるらむ

賤

おのが身を修むる道はまなばなむ

賤がなりはひいとまなくとも

民

國のためいよいよつくせ千萬の

民のころをひとつにはして

賤家

賤がすむわらやの様を見てぞ思ふ

雨かせあらし時はいかにと

田家翁

子らは皆いくさの庭に出で果てて

翁やひとり山田もるらむ

述懐

曉あかつきのねざめ静しづかにおもふかな

わがまつりごといかかがあらむと

御願しらす

限かぎりなき世よにのこさむと國くにのため

斃たふれし人ひとの名なをぞとどむる

同

つはものこころの心こころと共に乗のる駒こまも

つかるる知しらでいや進すすむらむ

同

勇いさみ立たつ心こころの駒こまを引ひきとめて

いたで負おふ身みや佗たしかるらむ

同

白露のおきふし毎に思ふかな

民の草葉のさかゆかむ代を

同

いかならむ事に逢ひても携まぬは

わが敷島のやまとだましひ

寄道述懐

白雲のよそに求むな世の人の

まことの道ぞ敷島のみち

述懐

山のおく島のはてまでたづね見む

世に知られざる人もありやと

ひらぎもの心をたねの教へぐさ

生ひしげらせよ大和島根に

述 懐

世の中は高きいやしきほどほどに

身をつくすこそ務なりけれ

述 懐

國民のちからの限りつくすこそ

我日の本の固めなりけれ

同

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

わが民草の上はいかにと

述懐

國を思ふ道にふたつはなかりけり

戦のにはに立つも立たぬも

夜述懐

夏の夜もねざめがちにぞ明しける

世のため思ふ事おほくして

寄松述懐

千歳にはあらずともよし常盤なる

松のみさをにならひてしがな

深夜述懐

軍びといかなる野邊にあかすらむ

蚊の聲しげくなれる此夜を

我心わがこころいたらぬ限くまもなくもがな

この夜よを照てらす月つきのごとくに

思往事

たらちねのみ親おやの御代みよに仕つかへたる

人ひとも多おほかたなくなりなりにけり

御題しらす

おのがじし務つとめををへし後のちにこそ

花はなの蔭かげには立たつべかりけれ

同

天あめを恨うらみ人ひとをとがむる事こともあらし

わが過あやまりをおもひかへさば

御題しらす

敷しまのやまと心の雄々しさは

事ある時ぞあらはれにける

社頭祈世

常しへに民やすかれといのるなる

我代を守れ伊勢のおほ神

寄國祝

蘆原の瑞穂の國のよろづ代も

みだれぬ道は神ぞひらきし

寄國祝

國民はひとつ心にまもりけり

遠つみ親の神のをしへを

祝言

うけつぎし國の柱の動きなく

さかゆる世世を猶いのるかな

故郷庭

池水に小舟うかべて遊びつる

むかし戀しきふるさとの庭

御題しらす

たらちねの親の心はたれもみな

年ふるままに思ひ知るらむ

同

鬼神も泣かすものは世の中の

人のこころの誠なりけり

社頭松

ときはなる松こそ立てれ動きなき

國をしづめの神のやしるに

雪中松

年年に雪をかさねて老い松の

みさをたかくもなりまさりけり

巖上松

苔むせる岩根の松のよろづ代も

うごきななき世は神ぞ守るらむ

松上鶴

風の音は静まり果てて千代よばふ

たつがね高し峯の松ばら

田家煙

小山田の里のけむりも年年に

立ち添ふ世こそ樂しかりけれ

寄山觀

天の下賑はふ世こそたのしけれ

山のおくまで道のひらけて

夢見故人

したはしと思ふ心や通ひけむ

むかしの人ぞ夢に見えたる

日出山

山の端にかかれる雲も晴れそめて

のぼる朝日のかげのさやけさ

水石契久

さざれ石の巖とならむ末までも

五十鈴の川のみづは濁らじ

松上鶴

あさづく日とよさかのぼる山松の

梢をしめて田鶴ぞなくなる

松不改色

深みどりいろもかはらぬ松が枝の

ときはかきはの末祝ふなり

海上雲遠

遠山のあらはれけりと思ひしは

沖にうかべる雲にぞありける

述懐

政事出でてききぬと思ひしは

夢なりけりな庭鳥の啼く

同

罪あらば我をつみせよ天つ神

民は我身の生みし子なれば

同

千早振る神ぞ知るらむ民のため

世をやすかれと思ふところは

同

上つ代の御代のおきてを違へじと

おもふぞおのが願なりける

曉夏鷄

庭つどり告げぬ先にと思ひしは

まだ宵の間のころなりけり

寄石述懐

雨だりにくぼみし軒の石を見て

難きわざとて思ひすてめや

御題しらす

煙草くゆらす暇も惜しと思ふ

日ははや西にかたむきにけり

同

世はやすく治まりぬとて世の人の

ゆるぶころぞ仇になるべき

御題しらす

ともすれば浮き立ち易き世の人の

こころの塵をいかで拂はむ

同

目に見えぬ神のこころに通ふこそ

人のこころのまことなりけれ

同

家富みて飽かぬ事なき身なりとも

人のつとめをおこたるなゆめ

同

くろがねの射し人もあるものを

つらぬき通せやまごころを

御題しらす

我^{わが}こころ及^{およ}ばぬ國^{くに}の果^はてまでも

よるひる神^{かみ}はまもりますらむ

同

天^{あま}さかるひなの果^はてまで茂^{しげ}らせむ

わがしきしまの道^{みち}をしへぐさ

葦間舟

とる掉^{さき}の心^{こころ}ながくも漕^こぎ寄^よせむ

葦^{あし}間の小^せ舟^{ふね}さはりありとも

時計

時^{とき}計^{はか}る器^{うつは}は前^{まえ}にありながら

狂^{くる}ひがちなる世^よにこそありけれ

懷舊

をりをりに思ひぞいづる國の爲

心くだきし人のむかしを

心

ともすれば掻き濁しけり山水の

澄ませば澄ます人の心を

諸葛孔明

臥す龍の岡のしら雪踏みわけて

草の庵を訪ふ人はたれ

忠

縣守心つくしの程見えて

わら屋の煙立ちまさりけり

踏む人は許多あれども言の葉の

道の高嶺は誰か越ゆらむ

同

いとまあらば踏み分けて見よ千早ふる

神代ながらのしきしまの道

勉學

いとまなき身も朝夕にいそしみぬ

思ひ入りたる道の爲には

折にふれて

思ふ事思ひ定めて後にこそ

人にも斯くと云ふべかりけれ

京都の宮廷の稚松を去ぬるとし山縣有朋
に賜ひけるに斯く生ひしげたりとて寫眞
を上りたるによませたまへる

おくりにし若木の松のしげりあひ

老の千年の友とならなむ

夕

つかさ人まかでしのちの夕まぐれ

心しづかにふみを見るかな

大正元年八月廿二日印刷

大正元年八月廿五日發行

明治天皇御製集奧附

正價三拾五錢



東京市麴町區飯田町六丁目廿四番地
編輯者 西本波太

印刷者 荻原勝次郎

東京市麴町區飯田町六丁目廿四番地

發行所

趣味社